

人事異動

交通局経理課 平成4年入庁

坪井 聰

たことを書いてみたい。

仕事を進める上で一番印象に残ったのは、担当者の仕事に対する順応力の高さと責任感の強さである。省では、人事異動のスピードが早く、ほとんどの人が二年以内に異動する。しかし、二か月もすると、まるで何年もその席にいたかのように仕事をしている。役所であるので基本的な部分は前例踏襲もあるが、ただ前年度と同じというわけではなく、何故そうするのかを自分の頭で、言葉で、理解している。そして、(その仕事の好き嫌いとは別として)自分の作成した文章や数字に対して責任感を持つている。もちろん、最終的な責任は決裁権者であると思うが、議論のもととなる資料の根拠や自分の意見をしっかりと持っていた。

横浜市に入庁して、この四月で六年目を迎える。その間に三つの職場を経験している。初めの三年間は交通局総務課、次の一年間は自治省財政局公営企業第一課、そして現在の交通局経理課である。自治省での一年間は、研修生という形で籍は交通局の総務課におきながら、霞ヶ関で仕事をしていた。このような研修生制度は従前から行われており、私のいた平成七年度も、他省に同様に職員が派遣されていた。多くの人が経験できることでもないのに、その時に感じ

明の方法も工夫するし、当然、資料の裏付けや内容に対する理解も深まる。そういう状況が、自分の仕事という意識を強めるのではないかと。説明する力や仕事に対する意識を高めるためには、ただ決裁箱に文書を入れるより持ち回りの決裁も勧められるのかと思う。

私自身は国という場面で緊張していたこともあり印象に残っているが、こうして文字にしてみると、仕事に対する取り組み方としては、至極、当たり前のような気がする。今更何を、という方も多いかもしれない。しかし、同じ職場に居続ける限りはこのようなことは考えなかつたと思う。人事異動で様々な職場を経験することは、本人にとって必ずプラスになるし、組織の活性化にもつながる。四月は、人事異動のシーズンである。

責任の強さを感じる一つの場面に、持ち回りの決裁があった。ほとんどの決裁が持ち回りのように思えたが、合議先他課の課長等でも、担当者が一人で説明し決裁(サイン)をもらう。当然、事前説明等もしているのだが、その場では何を聞かれるかは分からない。そのため、説

あとがき

横浜市のオリンピック開催の立候補については、庁内外で「いまさらなぜオリンピック」という反応が多い。これまで日本で開催された東京、札幌、そして来年の長野の例から、都市インフラの整備、自然環境への影響、財政負担などの問題点を考えると、成熟期を迎えた横浜においては当然の反応かもしれない。

クはサッカーのW杯や先進国サミットと並ぶ世界でも最大級のイベントであり、世界のマスコミが横浜の立候補を報道し、すでに、シティーセールスとして大きな効果をもたらしている。

しかし、横浜のオリンピックは広域で既存施設を活用し、財政負担も二十億円までとする一方、放映権料やスポンサーや入場料などを財源とする約千六百七十億円の事業を呼び込む。オリンピックはスポーツ競技にとどまらない文化と平和の祭典であり、都市文化や生活スタイルそのものを考えなければ十分な開催計画にはむすびつけられない。パラリンピックへの対応でバリアフリーのまちづくりの前倒し、「市民大使」などのボランティアによる受け入れ態勢、数年間の文化イベントなど、新しい未来型の都市を演出できる契機となるだろう。オリンピッ

「オリンピック開催には反対だ」という人にこのような考え方を伝えると、例外なく「面白そうだ」という反応が返ってきた。今回は、「世界と地域を結び付けるスポーツ」を都市政策の観点からとらえることを念頭に企画を考えたが、スポーツは元来、楽しい、エキサイティングなものである。ポジティブに考えれば、新しい方向を前向きに試みることで、楽しい活力が湧いてくる、という願いも込めつつもりである。

△南▽

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「自主研究レポート」への投稿をお待ちしています。応募される方は、事前に研究の概要をA4紙三枚以内にとまとめて企画局政策部調査課までお送りください。FAX 六六三一四六一三 お問い合わせは、電話六七一一〇二一九